

大衆文学大系

村井弦齋
村上浪六
塚原澁柿園
碧瑠璃園
大倉桃郎

監修 大佛次郎 川口松太郎 木村毅

講談社

大衆文学大系

3

大衆文学大系 3

村井弦齋 村上浪六
碧瑠璃園 大倉桃郎

塚原澁柿園 集

昭和四十六年七月二十日 第一刷

著者 村井弦齋 村上浪六 塚原澁柿園

碧瑠璃園 大倉桃郎

装幀者 田中一光

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二一二―一二一 郵便番号 一一二
電話東京九四五―二二二(大代表) 振替東京三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 大製株式会社

定価 二八〇〇円

落丁本・乱丁本はおとりかえいたしません

©村井弦齋 村上浪六 塚原澁柿園 碧瑠璃園 大倉桃郎

目次

村井弦齋集

桜の御所

五

村上浪六集

三日月

一〇

後の三日月

一四

妙法院勘八

一六

塚原澁柿園集

天草一揆

二五

碧瑠璃園集

後藤又兵衛

望

後の後藤又兵衛

奏

大倉桃郎集

琵琶歌

奏

万石浪人

奏

解説
年譜
題説

亮

二

三

村井弦齋集

桜の御所

上卷

一 尉が島(天狗棲む)

咲初むる花を薪に折添えて春をも運ぶ舟路かな、抑も相模国三浦郡桜の御所と聞えしは三浦三崎宝蔵山に在り國中第一の絶景にして満山千株の桜春毎に延年の色を現わし烟波万頃の海水長えに麓の渚を洗う、昔し右大将頼朝公此地の風景を愛し給い花の朝月の夕常に鎌倉より御遊あり此に桜の御所を建て、花に長楽の契りを籠め給いしとかや、鎌倉三代の榮華も一炊の夢と過ぎ行きて残る名残の桜の御所、花は昔に変わらねども変り果てたる世の有様、今は後柏原天皇の御宇、足利將軍義植公の時、此地を始め鎌倉一円を領せしは三浦大介義明が十余代の遠孫三浦道寸入道義同とて武勇鋭き武人なりけり、道寸は関東の

管領上杉修理太夫朝興の老臣なるが世の乱れに乘じて竊に関東八州を奪わんと志あり常に四隣を蚕食して威を遠近に振いけれども独り隣国金沢の城主栗岩寺下総守種久は勇猛人に勝れ殊に其娘小桜姫、女ながらも父の武勇を承けて力七十人に對し古の巴板額を欺く勇婦なりければ父を助けて所々の合戦に功名を顯わし父子の勇名関東に隠れなきより道寸も容易に其の攻め難きを察し表に和睦の意を示して竊に其折を窺いける、然るに下総守種久は予て宝蔵山桜の御所の風景を聞伝え三浦家を引連き間なるを幸い永正八年三月娘小桜姫を伴い従者數十人を引連れて三浦三崎に來りける、道寸竊に此事を聞き是れ屈竟の折柄なり、種久父子が油断を見済し不意に討取つて栗岩寺家の領地を奪うべしと嫡男荒次郎義意を始め三浦家名代の勇臣大森越前守佐保田河内守等を新井の本城に聚めて其評議を為しけるに荒次郎義意大に驚き「コハ父上の仰せとも覺えず、我家と栗岩寺家とは何の怨もあらざるに所領を奪わん慈心より不義の合戦を起し給わば関東八州の大小名誰か復た幕下に來り候うべき、殊更種久は容易に討取るべき敵に非ず、生中怨を結んで不義の名を受けんこと末代の恥辱に候う、構えてお思召し止まり給え」と面を冒して父を切諫なしければ道寸も我子の諫めに力なく「然らば此儀は思い止まるべし、去りながら尉が島の要害を人に見透されては一大事なり、汝行いて例の如く尉が島を守るべし」と荒次郎を其島に遣わしぬ、

去程に栗岩寺下総守は三崎に着して宝蔵山に登り見るに頃しも弥生の半にて花は今を盛りと咲き乱れ宛ら時ならぬ白雲が此山を包みしかと怪まる、天は晴れたり、日は長閑なり、風も和ぎけん海は一面の鏡の如く前には安房相模の津々浦々を望み沖に連なる真帆片帆、漁り舟さえ見えつ隠れつ、其風景実に言語に絶したれば下総守は小桜姫と共に暫く桜の御所に立ち休らい

四辺を眺めて從者に向い「聞きしに勝る此地の風景、世に類いなき眺めかな四辺に見ゆる名所旧跡委しく聞かば復た一入の興ならんに、誰かある此地の案内を知りたる者はなきか」と尋ねたり、從者の中より一人進み出で「某は毎度此地に來り所の者より四辺の案内を聞きて候う、先ず向うに見ゆる高山は房州一の富山にて、山の此方は鏡が浦、浦に連なる岬こそ首に名高き洲の崎の鼻にて候う」種久「して彼方に見ゆる島の上に烟の高く立昇るはアレこそ伊豆の大島なるか」從者「さん候う、大島の三原山とて舟人が夜の便りと承まわる」種久「島に連なる山は」從者「伊豆の天城、相模の箱根、富士の高嶺は雲の上に在り、其下なるは二子大山、山の此方の入江こそ小湊の浜にて候うなり」種久「面白し、後ろに見ゆる一城は三浦家の本城網代新井の城なるか」從者「去ればに候う、此城こそ前に網代の入江を控え後ろに油壺の天險を備え島ならでは入ること難き名城と聞え候う、アレ御覽ぜよ城の彼方に樹木鬱葱として繁れるは新井の城の千段櫓、其西なるは諸磯の浜と申し候う」種久「実にも要害蔽しき名城なり、扱此前の小島こそ尉が島と覺えたるが尉が島明神は靈驗荒たかなりと承まわる、汝も參詣致したるか」從者「去れば某も参りたる事の候う、此明神は一年一度ならでは參詣し難き所にて毎年五月五日に島開きあり其時信心の者大勢一つ舟に乗り島に渡つて明神に參詣致すものなるが參詣済めば決して後ろを振返らずして其儘舟に立帰るなり、若し後ろを振返れば裏山に棲める天狗に攫われ忽ち命を失うと申し候う」此時小桜姫は父の前に進み、「妾に心願の仔細あり、是れより尉が島の明神に參詣致し度く候う」と申しければ種久よりも從者は驚き「姫君は物に狂わせ給うか、五月五日の島開きならでは行くこと難き彼の島へ今御渡りあらんこと危き業なり、若しも天狗などの出で候わば如何にせん」小桜姫「仮令い

天狗鬼神なりとも人に害なすものならば唯一刀に斬つて捨てん、殊更妾は心願の仔細あつて神に參詣するものをナニ妨げのあるべきぞ」と勇氣を含んで申しければ父種久莞爾と笑い「いしくも申しつるものかな、扱其心願の仔細は如何に」姫「余の儀には候わず、天晴れ妾に勝りつべき大剛の勇士を良人に持ち父君の御武功を助け度く候う」種久「尤もの心願、然らば明神へ參詣致すべし」と許しける、姫は心利きたる從者数人を召連れ忽ち舟を用意して左しも怖ろしき魔所と聞えし尉が島へ赴きける、

二 唯一矢（射殺さん）

春の海の水は干潟に流るれど舟は潮路を漕ぎ抜けて尉が島へと急ぐなり、小桜姫は舟端に立上り小手を翳して島の景色を見渡せば周囲一里に足らねども巖岸高く聳えて打擲ぐる浪白竜を躍らし上には老杉天に朝して森々として星尚お暗し、此の物凄き有様こそ実に里人の魔所と称えて容易に到らぬも理なり、抑も此島を尉が島と名くる事如何なる謂れあるやらんと小桜姫舟人に尋ね給えば舟人畏り「左ればに候う、昔し此島に一人の尉棲み又彼なる沖の島に一人の姥の棲み候うが朝夕顔を見合せども海を隔てたれば語るに由なし、互の志は深けれど舟なれば渡る事も叶わず、共に岸辺に立出でて海を眺めて歎きけるが竜神も哀れに思いけん毎年一度五月五日に海魚を浮べて姥を此島に渡されたり、左れども夏の夜の短きは語らう暇もなき内に再び海魚に促され復た彼の島へ帰されければ姥は本意なき事に思い或日大木の潮に流れて寄りけるを渡りに舟と掉して竊に此島に來らんとしけるが竜神の怒りにや触れけん或は靈木の祟りにや波に揺られて海に沈めり、尉は岸より其有様を眺め泣く泣く大木を引寄せ見るに幹に縄を縛り張りたればこは疑いもなき神

木と坐るに渴仰の念起り島に曳揚げ其木を以て玉津島明神の尊影を刻み此に祭りて其身も百年の齢を保ちしとかや、其の刻める尊影こそ今も明神の御身体にて向うに見ゆる亀の子岩は其時の海亀なりと申伝えて候う」と島の由緒を物語る、折から舟は岸に着けり、舟人怖れ戦きて御参詣終りなば疾く／＼帰りに給うべしと姫を陸路に御しければ姫は従者の中より心利きたる郎党七内八内の兩人を扱ひ七内には弓矢を持たせ八内には我が好めたる大薙刀を担わせ道なき草を踏分けて明神山に登りける、看れば石段高く並びて其数百にも余るべし苔滑かにして足の溜らん様ぞなし、石段の左右は杉の太木枝を交え葉を黒ね道暗くして闇夜を辿るに異ならず、左れども大勇剛の小桜姫斯る惡所を事ともせず石段を登りて祠の前に到りけるに満山陰々として音もなく声もなし、玉兎昼眠る雲母の地金雞夜宿す不萌の枝とは斯る処か物凄や、姫は祠に立寄りて尊影を伏し拝み「アワレ尉が島明神に靈あらば妾の良人に無双の勇士を授け給え」と心の中に祈念なし臆て祠を立出でて尚お後ろの山に登らんとし給え七内八内大に驚き「御礼拝済み候わば速に御舟に帰り給え、人の怖るゝ裏山へ御登りありて何かせん」と袖を引留め諫めける、姫は莞爾と打笑ひ「此山の頂上こそ海陸一円を見渡して如何に眺めの好きやらん、斯る勝地を魔所として人の登らぬ愚かさよ」と道に當る荊棘を踏み分け二三町彼方へ進みけり、是れより山は一段高きを加え樹木生い茂りて方角をも忘るゝ計りなるが忽ち向うの丘の上に凄まじき物音して目方七八十貫もあると覺しき大岩忽然と人々の前に落ち來たる、七内八内魂を消し「スワこそ天狗の所為なり」と頭を抱えて身を縮むる姫は早くも七内が持てる弓矢を取りイデヤ妖怪御座んなれと矢を番えて待ち掛けたり、此時忽然として岡の上に現われたるは其丈七尺にも余りつべく頭の髪は銀の糸を植えたる如く顔緒

くして鼻飽くまで高く世に所謂る天狗鬼神の類いとは是れならんと覺しき姿にて此方を望み声を掛け「此は人間の來るべき所に非ず、速に帰らざれば天罰あらん」といふと敵かに云い放てり、世の常の者ならば此有様に驚きて魂身にも添わざるべきに大勇の小桜姫は屹と其姿を脱め「ヤア汝は鬼神の装いを爲せども声は正しく人間と覺えたり、盜賊か、曲者か、我が行く道を妨げなば唯一矢に射殺さん」と弓を満月の如くに引絞りぬ、鬼神は忽ち以前に勝りし大岩をいと軽々と目より高く差上げたり、山は愈々物凄し、幽に聞ゆる怪鳥の声、

三 若武者（魔神と見えしは）

物凄き峰より風は吹き落ちて雲に嵐の声すなり、此は魔界の尉が島、崖の上には怪しき魔神、崖の下には小桜姫、彼方は岩石、此方は強弓、互に矯めつ鋭いつして暫く睨み合いけるが矢頭を測りし小桜姫ヤツと声掛け矢を放てば彼方の魔神は身をかわし持てる岩石を楯として飛び来る其矢を發止と受けたり、小桜姫二の矢を番えんとせし時魔神は早くも大岩石を上より堂と投げ落せば七内八内の兩人は其岩に打敷か微塵になつて失せにけり、小桜姫大に怒り憎き魔神が振舞かなイデ二の矢を受けて見よと再び引絞つて兵と射る、其矢風を截つて魔神の面上に飛び行きしが彼方も曲者左知つたりと身を躍らせ小手を伸ばして飛び来る其矢を宙に確と握り留めたり、小桜姫心安からず、此上は魔神にもあれ天狗にもあれ我が手並を以て討取り呉れんと側に在りし大薙刀を取つて小腋に掻い込み魔神を望んで崖の上に馳せ登る、魔神は早くも後なる松の太木を根より引抜き軽々と打振てイザ來れと待ちかけたり、此方は女ながらも武勇閑東に隠れなき小桜姫、今此の魔神を討取らずんば生きて再び帰るまじと猛虎の荒れたる如き勢にて精神勵まし撃て掛

る、魔神は松の木を獲物となし大薙刀を相手にして丁々発止と撃ち合いしが何れも劣らぬ武芸早業、いつ果つべきとも見えざりしに小桜姫は面倒なりと長薙刀を打捨て魔神の松の木を確と押え我が力量にて捻じ倒さんと為したりしに魔神も不思議の怪力にて此方より捻じ返す、互に総身の力を両の腕に籠めエイヤエイヤと押し合いしが小桜姫は七十人力、魔神も劣らぬ怪力なれば互の力にて松は中程より捻じ折れたり、魔神は早くも声を掛け「ヤレ待たれよ希代の勇婦、扱も御身は勇名関東に隠れなき染岩寺家の小桜姫よな、聞きしに勝る武芸力量、古の巴板額たりともよも御身には勝るまじ、今迄の無礼御許しあれ」と顔に被りし魔神の面を取除くれば魔神と見えしは妾勇々しき若武者なりけり、小桜姫も大に驚き「イヤ御身の武勇こそ妾が遠く及ぶ所に非ず、左りながら御身は何人にて斯る怪しき姿をば為し給う」若武者「某は三浦道寸が嫡男荒次郎義意にて候う」小桜姫「扱は三浦家の鬼神と呼ばれ給ひし荒次郎殿にて候うか、仮令い荒次郎殿にもせよ妾が参詣の道を遮り剩え従者兩人を撃殺し給ひし仔細は如何に」荒次郎「扱其仔細こそ大事なれ、そも此島は様子あつて山奥に人を入れざるに折々速夫の者ども我が武勇に慢じて山奥に来る事あり、其時は番の者ども天狗の姿に身を装ひ威して山を追ひ落すか或は手向いなるものは斬つて捨てる習ひにて候う。今日も某此島に参りて山の番を致し候うに御身等主従が明神の祠へ御参詣あり難く大胆にも此裏山へ分け登り給う気色なれば威して帰し参らせんと一たび石を落せしなり、然るに御身の武勇中々帰り給うべき様子もなければ討取らんとは思ひしが女人の事故従者を撃つて御身を懲らし参らせんと斯く計らいし愧かしきや」小桜姫「扱は此島こそ新井の城の要害にて兵糧武具を籠め置き万一に備え給う所と覚えたり」荒次郎再び身構えなし「斯く見透し給う上は女人なりとて容赦な

し難し」と刀に手を掛けヌツクと立ちたる有様は魔神天狗よりも恐ろしかりける勢いなり、小桜姫は其勇威を感じ是れこそ尉が島明神の我が心願を容れて斯る英雄を引合せ給ひしものならんと心竊かに打悦び「イヤ待たれよ荒次郎殿、御身が妾を助け給ひし情に對し妾は決して此島の事を何人にも漏らし候うまじ」荒次郎「誠そうか」小桜姫「何とて偽りを申さん、弓矢八幡も照覧あれ、妾は誓いを立て候う」と偽りならぬ真心は其の面に現われければ荒次郎も始めて心を安め「左あらば小桜どの、人には見せぬ要害ながら御身を此峰に案内申して山上の風景を御覧に入れん、此方へ来ませ」と先に立ちて小桜姫を尚お山奥に誘ひたり、

四 関の聲（不思議やな）

そも尉が島 of 山奥と云わば上は雲衝く松の峰、下は底知れぬ千尋の海、嵐も波も音合せて世にあるまじき仙境なり、小桜姫は荒次郎に伴われ此峰に登つて四方の景色を見渡せば宝蔵山も新井の城も歴々として眼の下に在り、霞みにけりな今迄も波間に見えし大島山、峰の烟りは雲と化し、雲復た水に連りて極目千里名に聞えたる相模灘、風景言葉に述べ難ければ小桜姫茫然として醉えるが如く我を忘れて飽かぬ景色を眺め居たり「如何に荒次郎殿、妾が城下金沢と申すも聊かの風景世に聞えて候うが斯る景色に比べては物の数にも候わずアワレ我身も斯る処に住居して此島の島守となり度く候え」と荒次郎を顧みて申しければ義意莞爾と打笑ひ「イヤ明暮見馴れて候えば島の景色も珍らしからず、それよりも御身の御城下金沢の八景とやらんを一度は遊覧致し度く候う」小桜姫「必ず御入り候え妾御案内申すべし、松葉山能見堂の風景又は峰が岡八幡宮を御遊覧あらば一入の御慰みに候わん、今こそ春の海の景色も長閑にて候えは是

より御父君に御願ひありて妾と共に御入り候え妾も父種久に其事を申しなば父は定めて悦び候うべし」と離れとも無き小桜姫、深き心を人や知るらん、荒次郎義意も同じ思いにありながら父道寸の心を兼ねて俄にそれとも答え難く「御志しは嬉しけれども果ねて参り候わん、それよりも御身親子、暫く此地に御逗留あつて緩々四辺の景色を御覧候え、アレ向うに見ゆる彼の岬は松輪の鼻剣崎と申して其地に名高き星見の池と申すもの、候う、其池は岸の岩石自然と崩れて自ら池の形を成せるに海水石門より流れ入り水深きこと数十丈、岩の蔭なれば波立たず、日の内と雖も水暗く、底に星影の写りて候えば星見の池とは名づけたり、斯る名所も候うに復た此後ろの山蔭に矢の根井戸と申すもの、候うそれは昔し鎮西八郎為朝が大島に流されし後討手の舟と合戦して大島より射出したる矢海を渡って其井戸に落ちたりと申し伝え候う、尚お明日も御逗留あらば某父に願つて御身親子を星見の池又は矢の根井戸の旧跡に御案内申すべし」と是れも姫には別れとも無し、実にや希代の勇婦と無双の勇士、互に其手並を知りしものから斯る英雄を良人に持ち度し、斯る勇婦を妻にし度しと意気相合して慕わしく互に心を傾けて其姿を眺むれば荒次郎義意は身の丈七尺五寸筋骨逞ましくして丈十丈の鬼をも拉がん勢いあり、小桜姫は亦た無双の勇力ありながら其顔の美しきこと譬えば桜の御所の花も羞らい鏡が浦の月も閉じなん風情なり「荒次郎殿、御身が金沢へ御入り候事の叶わねば妾父に申して尚お暫くは桜の御所に逗留致さん、御言葉に甘えんは恐れあれども星見の池矢の根井戸の旧跡などを御身と共に遊覧致さば之に過たる幸いは候わず」荒次郎「某とても御身の如き勇婦を御案内申さんこと何よりの面目にて候え」と互に意中を語る折柄俄に宝蔵山の方に当って咄と揚げたる関の声、コハ不思議なりと荒次郎立上つて宝蔵山を見渡せば

新井の城の裡門より我が家の定紋打つたる大旗を翻し其勢凡そ八百余騎宝蔵山を望んで馳せ出せしが忽ちの内に桜の御所なる楽岩寺種久を四方八方より取巻いたり、荒次郎慨然とし歎息し「扱は父上我が諫めを用ひ給わずして種久殿に野心を抱くと覺えたり」小桜姫ヌツクと身を起し「ナニ御身の父道寸殿が妾親子を討取らんとし給うか、然らば妾も御身の敵なり、よも此儘には帰し給うまじ、叶わぬまでも尋常に勝負して御身の手に掛つて相果てなばそれが妾の本望なり」と長薙刀取つて身構えたり、颯と吹き来る沖の風、天は俄かに掻き曇り、桜の御所に散る花は雪の吹雪の飛ぶ如し、

五 花下の戦い（美しくしや）

月に村雲、花に嵐、それは浮世の習いなれども是れは復た情けなや、心合いたる勇婦と勇士が互に招き招かれんと末を約する折柄に不意に起りし此の合戦、荒次郎義意は氣支わし氣に宝蔵山を打眺め「アイヤ小桜殿、某は御身親子に野心も無し、父を諫めて此島に來りし程なれば何とて御身を討取り候わん、一刻も早く向いの岸に御渡りあつて種久殿と一手になり給え、斯く敵味方と分るゝ上は御身親子を救わんこと力に及ばざれども御身が此島の密事を漏し給わぬ誓ひに對し某一条の路を教え申さん、アレ御覧ぜよ宝蔵山の麓より東に當つて一筋の路あり、彼の路を一里東に赴けば毘沙門堂の浜にて候う、浜より舟に召されなば追手の風に金沢まで唯一日の舟路ならん、構えて討死し給うな」と漏す言葉は勇婦の爲めなり、小桜姫打悦び「忝けなし荒次郎殿、此の御情けは何時の世に酬い申さん、左らば御身も御機嫌好く」と例の大薙刀を小脇に掻い込み荒次郎に別れて一参に山の麓へ馳せ降れば下には姫を待てる小舟あり、小桜姫其舟に打乗つて颯と向いの岸に渡れば宝蔵山は今戦いの央と

見えて矢叫びの音聞の声天地も崩るゝ計りなり、左れども味方は数十人に過ぎず、敵は目に余る大勢なれば父種久は八方より囲まれて何処へ遁れん様も無し、小桜姫此有様を眺めて憤然と怒りを発し敵が勢の後ろより例の大薙刀を以て縦横無尽に薙ぎ立てければ道寸の勢は大に驚き扱こそ名代の小桜姫なり近寄つて二つ無き命を失うなど道を開いて左右へハッとして逃げ散れば小桜姫は韋駄天の如く桜の御所に馳せ着いて「父上御心を安め給え、尉が島より小桜が戻りて候う」と大音に呼わつたり、父種久は力を得「オー小桜か、遅かりし、三浦道寸入道が卑怯にも我が油断を見澄し不意に起つて此合戦、味方は続く勢も無し、桜の御所を枕として此の処に討死致さん、汝は一旦此を遁れしめんとす、小桜姫は頭を振り「イヤ父上、軽々しく討死し給うべからず、此囲を破つて麓に降らば国へ帰るべき路の候う、いで妾が先陣仕らん」と血に染みたる大薙刀を真甲に振り醫し群が敵を前後左右に斬伏せ薙ぎ伏せ纏て一条の血路を開いて麓の方へ降らんとしければ三浦道寸味方を勵まし「ヤレ種久を遁すな、小桜を討取れ」と大音に下知すれども最前の手並に怖れて誰あつて道を遮らんと云うもの無し、道寸口惜しが「今此敵を撃たん者は荒次郎の外にあるべからず、義意は如何致せし、尉が島に参つて呼び来れ」と、従者一人を走らせけるが此時三浦勢の中より黒皮緋の大鎧を着したる武者一人大身の鎧をリュウリュウと打振つて小桜姫の前に立塞がり「最前よりの御働き人の目を驚かし候、斯く申す某は三浦道寸が御内に於て鎧の九郎と異名を取りし津久井九郎義高なり、物の数には足らねどもイデ御相手仕らん」と小桜目掛けて突掛け来れば相手は扱はぬ小桜姫大薙刀を取直し微塵になれと撃下す、此方と聞ゆる剛の者鎧の秘術を顯わして千変万化に戦えば鎧の穂先と薙刀の刃よ

り火花の飛び散つて四辺目ばゆき計りなり、上には咲ける山桜、闘いの烈しさに風も無けれど花散りて小桜姫が黒髪にバラ／＼パッと落ちかゝる、世に美しくき姫君が大薙刀を打振つて桜の下に戦う有様、敵も味方も其姿に見惚れけん茫然として酔えるが如し、此時津久井九郎は如何なしけん鎧を中程より斬り折られたれば走り寄つてムンズと組む、小桜姫打笑い小手を伸して綿嚙掴み左の手に高く差上げて敵勢の真中へ趨の如くに投げ出せば九郎義高眼口より血を吐いてこそ失せにける、力と頼みし九郎さえ此の如くなりければ三浦勢は最早誰向わんと云うもの無く姫が薙刀の光りを見ると其儘四方へ逃げ散りければ小桜姫と種久は茂れる森を潜り抜け、路を索めて漸くに毘沙門堂の浜まで落ち延びたり、然るに浜には舟一艘も無し、後よりは三浦勢尚お懲りずまに迫り来る、

六 舟に七人（陸には一人）

前に海、後ろは敵、渡らんとするに舟もなし、返さんとするに道もなし、小桜姫と種久は是迄遙に落延びながら此にて空しく果てんこと残念なり舟なければ陸路の敵を破つて斬抜けんと願みて従者を数うれば従うものは僅に六人、何れも身に数か所の疵を負わさるなく、中にも小桜姫の腰元八重綱は姫より習いし武芸を以て敵許多討ちたりけん薄色の衣も血に染みて緋紅と変りけり、斯る有様なれば此の残兵を以て再び戦うべき術もなくアワレ尉が島明神の神徳にて一艘の舟を此浜に寄せ給えと小桜姫遙に尉が島を望んで祈念すれば不思議や島の彼方より追手の風に帆を揚げて一艘の舟此浜へ走り来る、種久主従大に悦び舟の岸辺に着くを待ちて其側に進み寄り、「如何に舟人に物申さん、我等を其舟に載せて武州金沢の浦まで便船せよ」と種久の郎等関団六先ず躍つて其船に飛乗れば舟人騒げる色もなく

と勇み進んで申しける、荒次郎義意大に憂い「始めより何の怨みもあらざるに不意に起つて人の油断を撃ちしさ道ならず、それを再び此方より逆寄せなば仮令い楽岩寺家の領地は奪うとも関東の人心は皆な我が家を離れ候わん、それよりも油断なり難きは当国小田原の城主北条早雲入道にこそ候え、此人予ねて我家を滅し相模一國を我物にせんと心の心あり兵を練り武を講じ日夜我家の隙を窺ひ候えば早雲こそ未恐ろしき大敵と覚え候、早雲を撃がんには楽岩寺種久如き勇將こそ味方に取りて屈強の援けなり、早雲志を得候えは楽岩寺家とてよも安穩に済み難きは種久も知り候わん、左れば今より楽岩寺家に使者を立て、今日の事家臣の狼藉より起りしと御託あり再び和睦を結んで共に北条を撃がんとの御約束を遊ばされ候え、若し種久早まって北条に味方せば是れこそ由々しき御大事に候う」と理非分明に述べけるが父道寸は武蔵の地を奪つて関東に覇たらんと心の心止み難く「否々種久は再び和すべきものならず、汝は留まつて新井の城を守り候え、我自ら兵を率いて金沢の城を攻取るべし」と諫を用ゆる景色なし、荒次郎も力なく「然らば某は城に留まり北条早雲が後ろを襲わぬ手当を為すべし、して今日毘沙門堂の浜にて生捕候う女武者は如何計らひ候べき」道寸生捕を打眺め「女人の事故日頃なれば命を助け得さすべきが今は金沢攻の途出なり、女ながも敵の一人、首打つて軍陣の血祭にせよ」荒次郎「こは思ひも寄らぬ仰せかな、関東一の名族と天下に名を得給ひ父上が敵に懼れて女人の首を打つたと聞えなば東八ヶ国の若殿原に笑われ候わんアワレ願くば此生捕を某に御預け下され度し」と請ひければ、道寸も其言葉に従ひ八重絹を荒次郎に預け其身は精兵八百を率い時を移さず武州金沢に向て発向せり、道寸は固より三浦累代の大家族にして所領相模半国に跨り一族門葉九十余人の多きに及べば道寸途中より一族が方へ使を

發し此度武州金沢を征伐するに由て一同軍陣に参着致すべきよし触ければ菊名の城よりは菊名左衛門重氏、初声の城よりは初声太郎行重を初めとして岩戸、長沢、一色、蘆名、の諸将各々軍卒を引連れ取敢ず道寸が本陣に馳せ参じ三浦領を出る頃には総勢三千余騎となりける、此勢いに乗て金沢の城を唯一探に攻落し進で武蔵一國を平定せばやと其翌日は浦郷の天神山まで打出でたり、

八 此恨み（晴さばや）

遙々の八重の潮路を過ぎ行きて我が故郷に帰る舟かな、楽岩寺下総守種久は娘小桜姫と共に宝蔵山の難を遁れ毘沙門堂の浜より海を渡つて其夜の明方本国金沢の浦に着船なしければ種久大に舟人を勞い、「我等が危きを救ひ遙々の海を渡せしこと神妙なり、褒美の品を取らすべければ我等と共に城中まで来るべし」と促せしに舟人は主従七人を陸に卸して申す様「情けは人の為めならず、海を御渡し申せしは我等が主、イヤナニ我等が信仰致す尉が島明神の神慮に依る所、争でか褒美の品を望み候わん、用事相済めば是れ迄なり、いざ御暇申すべし」と舟を再び沖に向け飄然として漕ぎ返す、種久遙に声を掛け「扱も不思議なる舟人かな、汝は何処の浦の者にて名は何と申し候ぞ」舟人漸く振返り「賤しき身なれば名も候わず、我等は尉が島の大天狗に仕え申す者なり」と答うる声も次第に遠ざかつて舟は波間に隠れたり、種久の郎党関団六世に稀有なる事に思い「恐れながら我君、今の舟人こそ予て我君が御信仰深き当峰が岡八幡宮の神靈仮に姿を現わし給いて我君の御武運を守護なし給うと覚え候う」と申しけるに外の郎等も口を揃え左こそあるべしと同じけり、独り小桜姫は心にそれと推しけれども漏すべき事ならねば口にも出さず、纏て種久主従は城に入て漸く心を安めけ

るが種久は無念遣る方なく俄に一族郎等を城中に呼聚め「世に憎むべきは三浦入道寸すなり、我等昨日宝蔵山に登り桜の御所の花盛を遊覧なしけるに我等の油断を見澄まし不意に起つて我等親子を討取らんとしたりしは我が所領を奪わん慾心に覚えたり、此怨を晴さんには是れより兵を起して三浦の地に攻入り運好くは新井の城まで攻落すべし面々も日頃の武勇を現わし相模武士に後れを取り候うな」と怒氣を含んで申しける、左なきだに君歸しめらるれば臣死すと忠義に凝つたる若殿原此物語に無念の切齒を為し是れより新井の城に押寄せて道寸父子の細首打落すべしと勇氣日頃に百倍して見えにける、独り小桜姫は悦ばず「父上の御無念は去る事ながら三浦家は累代の名族にして道寸は管領家の執權たり、彼妄に我家に仇を為すべき謂れなし、此度びの事或は家臣等の野心より起りしにもや候わん、宜しく一旦三浦家に使者を立て給いて昨日の趣意を篇と御質しあるべし、其上に兵を起すも遅き事は候わじ」と述ぶる心は荒次郎を頼りに思い如何にもして此合戦を留め度きが願ひなり、種久頭を左右に振り「イヤ／＼趣意を質すまでもなし、昨日宝蔵山の敵陣に道寸入道が自ら兵を指揮して居たる上は彼の野心と極まつたり、疾く／＼出陣の用意して三浦領を略荒すべし」と家臣に下知を伝えたる折柄浦郷より急使あつて「只今三浦道寸三千余騎の兵を率いて天神山の彼方まで押寄せ候う」と注進したり、種久奮然として立上り「扱は道寸めに先を越されたるか、我が用意の整わぬ内に此城を攻落さん工みと覚えたり、其儀ならば此方にも敵の謀事に由て敵を破るべき計略あり、如何に小桜姫、汝は逞兵六百人を率いて天神山の麓に伏勢せよ、我自ら羸兵数百を先立て天神山の中程まで打て出でなば敵は必ず我等が用意の整わぬと覚え短兵急に攻登るべし、其時我は弱々しく戦つて敵を山の迫りへ誘き寄せれば汝は後より起つて三浦勢

の逃路を塞ぐべし、斯くて前後より激しく攻め立てなば三浦勢を地獄谷へ追落し道寸を討取んこと手の中に在り」と流石関東に名を得し智勇の大將、計略を定めて浦郷天神山へ押出したる、小桜姫も今は詮方なし、道寸が斯くまで野心を逞しゅうする上は手痛く攻め破つて我が家の武勇を道寸に知らしめ手懸をさせて向うより和睦の事を計らわしめんと心勇んで打立ちける、

九 軍振り（心得ぬ）

三浦道寸入道は敵に斯る計略のありとも知らず、無二無三に金沢城へ攻寄せて唯一揉に攻落さんと天神山の麓まで来りけるに物見の者馳せ帰り、「只今敵兵三百余人天神山の彼方まで押出し候う」と告げたれば道寸阿々と打笑ひ「扱は栗岩寺種久早くも城に帰り見兵を率いて防戦に來りけるか、彼が城に籠つて固く防禦の備えを為さば味方却て難儀ならんに自ら城外へ打出でたるは是れ首を我に授くるなり、イデ者ども今日の合戦に種久の首を撃ちたる者は第一の功なるべし、励めや者ども、進め進め」と下知なして天神山へ攻め登る、此時種久は山を降つて半腹に備を立てたるが態と敵を怠らしめん為めに射手を揃えて矢戦を始めたなり、道寸此有様を見て味方を顧み「アレ見よ種久は無理に城中の兵を纏めしなれば手詰の合戦叶い難く頻に矢戦を為して時を移し其暇に後陣の兵を駆り聚めん計略と覚えたり、左れば空しく矢戦をあしらひて時を移さんより短兵急に此陣を撃ち破れ」とエイ／＼声して攻め登る有様は矢も楯も溜るべしとは見えざりけり、種久心に打悦び態と防ぎ難き体を為して次第に後ろへ兵を引けば道寸氣を得て味方を励まし「スワコそ敵は浮足立って見えたるぞ、此図を外さず攻め破れ」と、大音に呼わりて次第に兵を進めけるが流石に老功の武者なれば向いの道の切所を眺めて俄に駒を留め「ハテ心得ぬ種久が軍振か

な、まこと我兵を防がんとならばアノ迫りにこそ兵を纏めて我が道を遮るべきに左はなくて自ら切所を引き我兵を迫りに誘き寄せんとすは計略ありと覚えたり、斯る切所に味方を入れて双方より撃たれなば一大事、スワ引け」と下知なして俄に兵を留めたり、種久山上より此様子を眺め今少し切所に導きて敵を襲にせんとしに道寸早くも悟りたるか、場所は構わず討取れと用意の狼煙を高く天に向つて打揚げければ麓に隠れたる小桜姫が一手の逞兵俄に起つて三浦勢の後ろを断ち切つたり、「扱こそ敵の計略よ、一方を撃破つて長柄の城まで引揚ぐべし」と道寸入道自ら駒の頭を立直して小桜が兵に向いたり、種久は今こそ道寸を通すなと山上より輪宝の如く撃て降れば三浦勢三千余騎前後に乱れて敗走す、小桜姫は手痛く道寸を懲らしめて再び野心を起させまじと自ら例の大薙刀を打ち振り道寸の本陣を目掛けて阿修羅王の如く斬り入つたり、左なきだに乱れ立ちたる三浦勢此の勢いに辟易して誰れ防がんとするものなれば小桜姫は人なき所を行く如く道寸の馬前に近づきて大音揚げ「如何に道寸、先頃は能くも我等の不意を撃ちたるぞ、其時の返報に武蔵鍛冶が鍛えたる薙刀の斬味見せ申さん」と疾風の如くに斬つて掛る、道寸も遁れぬ所と大太刀を引抜き「女の分際にて此道寸に向わんとは推参なり、イデ我手に掛けて相果てろ」と二打三打撃ち合ひしが道寸の郎等長沢六郎馳せ来り「我君には早く長柄の城へ御引揚あるべし、此敵は某が引受候わん」と小桜姫に撃つて掛る、道寸は好まぬ戦いなり、小桜姫を郎等に任せて其身は忽ち引返しければ小桜姫大に怒り「妨けするな下郎め」と長沢六郎を唯一刀に斬つて捨て再び駒を速めて「道寸返せ」と追駈けたり、道寸は小桜姫に迫られて再び太刀を合せんとせし時菊名左衛門重氏中を隔てゝ小桜を防ぐ、小桜怒つて左衛門が馬の足を薙刀にて払いければ左衛門堪らず馬

より墜るを小桜姫は見向きもやらず尚おも道寸が跡を追駈けて其間近くなりければ道寸も怒りを発し斯くまで女に追わるゝとは我が末代の恥辱なり引返し勝せん」と駒を後ろへ返直せしに初声太郎蘆名三郎等馳せ来つて小桜姫を遮り其暇に道寸は危きを遁れて遂に長柄の城へ入りにける。

斯くて楽岩寺種久は今日の合戦勝利を得たれば勢いに乗つて直ちに長柄の城を取囲み敵の後詰のなき内に此城を攻落して道寸を討取るべしと秘術を尽して攻めたりける、道寸も今は防戦に苦しみ急に使を新井の本城に走らせて嫡男荒次郎に救いを請えり、

十 此武者振（御覽あらば）

一夫城を守れば万卒も攻め難し三浦荒次郎義意は先に父と別れて独り新井の本城に留りけるが彼の生捕りし八重絹の繩を解き懇に之を痛わりて「今に合戦止みなば父に請うて金沢の城に送り帰すべし、固より楽岩寺家と当家とは差したる宿意のあるにあらねば折を見て我れ必ず和陸の事を計らわん、其方も本國に帰りなば種久殿親子に能く我が意を伝えよ」と頻に之を慰めける、八重絹も其義に感じ、斯る義勇の大將は復たあるべからず、姫君小桜様には予て天下の英雄を良人に持ち度しとの御望みなれば斯る英雄の世にある事を御知らせ申しなば應頼もしく思し召されんと主思ひの忠義者竊に心を荒次郎に傾け早く合戦の止めよかしと祈りしが荒次郎も姫の事は忘れ兼ねてそれと無く問ひける様「人の噂に楽岩寺家の小桜姫は武勇古の巴板額に劣らぬと承る、斯る勇婦を妻にせんこと武士たるものゝ本意なるが姫には最早定まる婿君のあり候うか」と申しけるに八重絹は聞くも嬉しき言葉かなと打悦び「申すも賢き御事ながら我が主君小桜姫には其御力量七十人に對し給ひ武芸早業も城中の武